

書評

プストヴォイト著 『トゥルゲーネフ』

П. Г. Пустовойт, Иван Сергеевич Гурьев.

изд. М. У. 1957, стр. 139.

金子 幸彦

トゥルゲーネフについての、ソ連における最近の研究書としては、本書のほかに、これとおなじ表題で、プロツキー（一九五〇）、ペトロフ（一九五〇）の書が出ており、アカデミヤ編「ロシヤ文學史」中のビヤールイの筆になるトゥルゲーネフの項（第八卷、第一部、一九五四）も評傳として均勢のとれた著述である。特殊な研究としてはゴルブコフの「トゥルゲーネフの技法」（一九五五）、チムシキヤンの「文學批評家としてのトゥルゲーネフ」（一九五七）などがある。

ここに紹介するプストヴォイトの書はモスクワ大學における著者の十九世紀ロシヤ文學史講義要綱の一部で、比較的わずかな頁数のなかにトゥルゲーネフの創作過程全體にわたり、簡潔な説明をあたえていて、ソ連における最近のトゥルゲーネフ研究の一狀況を知らせてくれる。

トゥルゲーネフは時代の動きに敏感に反應し、むしろ時代の

氣分に支配されることの多い作家であったが、本書ではこの作家の社會的思想と創作との關係をあとづけつつ、彼の藝術方法の本質、その才能の性格をあきらかにすることに記述の重點がおかれていように見える。著者はトゥルゲーネフの創作を六つの時期に分けている。このこと全體にはさしたる問題はないであろう。一八三四—四八年は習作時代とされる。敘事詩「バラシヤ」（一八四三）その他においては「エヴゲーニー・オネーギン」や「ムツイリ」への模倣が目立つが、登場人物は時代の反映として、これらの作品にくらべて倭小化され、より一層懷疑的になつてゐる。しかしこの時期のトゥルゲーネフの作品には、農奴制の問題と貴族インテリゲンツィヤの肯定的主人公の問題がすでに提出されている（二六頁）。

これらの問題は、第二期の作品に屬する「獵人日記」（一八四七—九二）「ルーザン」（一八五六）「貴族の巢」（一八五九）では、中心的な問題となる。著者はトゥルゲーネフの創作が多くの場合實在の原型に依據し、創造的ファンタジヤにたよることの少い點を指摘し、本書の全體を通じて、主要なロマンにつき、主人公の原型と形象との問題を綿密に鮮明している。

しかしこの時期にトゥルゲーネフによる貴族インテリゲンツィヤの肯定的主人公の探求は一つの矛盾に行きついている。彼は「シチグロフスキー郡のハムレット」（一八四九）と「餘計者の日記」（一八五〇）においてロシヤ的ハムレット主義の二つの變種を描かなければならなかつた。これらは四〇年代人のおちいついていた絶望と懷疑の反映であり、むしろ多分に否定的な形

象である(四七頁)。

本書では「シチグロフスキー那のハムレット」から「ルーヂン」(一八五六)にいたる時期の社會的諸條件の變化と作者の內面的發展との説明がはぶかれてゐるが、ニコライ一世の支配のおわりとクリミア戦争の敗北にともなう、ロシア社會のあたらしい動き、いわゆる六〇年代の開始がトゥルゲネフの思想および創作の上にも大きな影響をあたえたことは言うまでもない。しかし「ルーヂン」は六〇年代の社會的氣分の高まりを告げるような、明るい作品ではない。それはこの作品がなによりもまず貴族インテリゲンツィヤの社會的、歴史的破産の切迫の、作者による豫感をつよく反映してゐるからである(五〇頁)。

六〇年代は貴族階級に代わる雜階級人の登場の時代である。トゥルゲネフは「ルーヂン」において貴族インテリゲンツィヤの、言葉と行爲の分裂を描いたが、同時にこれに代わる、あたらしい行動人のタイプとして改良主義的、自由主義的な地主レジネフを登場させてゐる。ルーヂンの原型がバクーニンであることはひろく知られてゐる。ルーヂンはスタンケーヴィッチのグループで育つた、四〇年代の教養ある貴族青年の最良の代表者である。トゥルゲネフはレジネフの立場からバクーニンの、ルーヂンのラヂカリズムを批判し、その肯定的、否定的側面をあきらかにしようとしてゐる。この作品の創作過程における作者の立場の不安定性、その再三の書きかへは主人公の性格の矛盾の原因となるが、この矛盾はまた時代の矛盾の反映でも

ある(四九頁)。しかし作者が肯定的人物として描いたレジネフは讀者の同感を呼ぶことが少い。一八六七年に書かれる「煙」の主人公リトヴィノフと同様に、彼はなによりもまず勤勉な、現實的な農場經營者である。

暗示的なことばのほかには、どんな行爲も不可能であつた時代に前方へのルーヂンの大膽な呼びかけはバシストフのような純真な青年の心につよい感動を呼びおこすことができたという意味で、ルーヂンの社會的役割はオネーギンやペチョーリンの場合よりもはるかにひろい(五一頁)。

「貴族の巢」においては貴族インテリゲンツィヤの肯定的タイプの問題はあたらしい發展を示す。ラヴレツキーはことばと行爲との分裂を克服するための、くるしい探求をつづけ、民衆に近づくために努力し、みずから勤勞にたずさわろうとするが、その試みは失敗におわる。彼はルーヂンとはちがつて、なによりもまず、民衆のなかにある眞理の承認と民衆にたいする恭順な態度とを要求するが、民衆のためにすこしでも役立とうとする、その誠實な努力もついに實をむすぶことができない。ロマンのおわりで彼はおれの完全な無益さのみとめ、若い世代に祝福のことばを送り、彼らにすべての期待をかける。プストヴォイトはここでもラヴレツキーのベシミズムを貴族インテリゲンツィヤの社會的、歴史的破産の反映を見る(六五頁)。

著者は六〇年代の初期をトゥルゲネフの創造のもっとも充實した時期として、「その前夜」(一八六〇)と「父と子」(一八六二)をこの作家の作品のなかの最高のものと見てゐる。トゥ

ルゲーネフは同時代の社會生活のすべての大きな事件に敏感に反應したばかりではなく、歴史的眞實のために個人的偏愛を克服することができた。そして、ルーヂンやラヴレツキーの時代が過ぎ去ったことを感ずるとともに、これにかわる、あたらしい主人公を自分とは思想的に縁遠い雜階級の民主主義者のなかに見だし、「その前夜」と「父と子」において最大限の客観性をもってこれを描こうとした(六七頁)。

「その前夜」ではトゥルゲーネフはロシアにとって必要なのは國民の解放のためのたかひに献身するインサーロフのような、誠實な人間であることを示したが、トゥルゲーネフにとって重要なことはブルガリヤ人インサーロフが社會的改革のための闘士ではなく、自國の獨立のための闘士だということである。これにたいして「同時代人」誌の批評家ドブロリユーボフはロシアのインサーロフの出現を期待し、これを革命的な理想の實現とむすびつけている。このことを論じたドブロリユーボフの「その日はいつくるか?」の發表をめぐるトゥルゲーネフと「同時代人」誌との對立、同誌の執筆陣からのトゥルゲーネフの脱退は彼の貴族的自由主義の立場と「同時代人」誌の革命的民主主義の立場との對立の一つの現われであり、六〇年代の社會的闘争の反映である。

しかしトゥルゲーネフは生活の眞實への忠實さを失うことなく、二年後にはバザーロフの形象を創造する。バザーロフの評價においてポストヴォイトは六〇年代人の典型をチエルヌイシエフスキー、ドブロリユーボフのなかに見だしているのだ、

彼らとくらべることによって、バザーロフの形象の寫實性の程度を規定しようとする。そして民衆、科學、藝術等にたいするバザーロフの見解を分析し、それらが若干のゆがみをもちつつも、六〇年代の雜階級民主主義者にとって本質的な側面をもっていることを指摘する(七六一八〇頁)。

しかしバザーロフの評價におけるこのような規準には、若干の疑問がのこるであろう。著者はたとえれば民衆にたいするバザーロフの不信は革命的民主主義者に個有的なものではないゆえに、「ここでトゥルゲーネフは歴史的眞實を犯している」として、民衆にたいするバザーロフのベシミズムは作者トゥルゲーネフの世界觀の階級的限界性によるものであると述べている(七七頁)。

バザーロフは革命や社會主義をロシア社會の當面の課題とは考えず、また土地所有の共同體的原则にたいしても、なんらの期待をももっていない。このことはバザーロフとチエルヌイシエフスキーとの、むしろ本質的なちがいを示すものであるが、本書ではこの問題にはふれていない。

バザーロフの形象は多くの矛盾をもっており、とりわけロマンの後半において彼が戀愛の破局を経験したのちには、彼の思想と言動とは大きな矛盾を示すようになる。ポストヴォイトがこれらの矛盾を、當時のロシア社會の現實にたいする作者トゥルゲーネフの理解のなかの矛盾の反映として、とらえていることはそれ自體としては正しいが、このことと同時にこれらの矛盾を六〇年代初期におけるバザーロフ的タイプの雜階級インテ

リゲンツィヤ自身のもつ矛盾の反映として理解することも必要であろう。

バザーロフを一八六三年に發表されたチエルヌイシェフスキのロマン「何をなすべきか？」の主人公ラフメートフへの過渡的タイプとする見解はビョートル・クロボトキン（革命家の思い出）以来、今日のソ連におけるロシア文學史家のあいだでも定説となっており、プストヴォイトもこの立場に立っているが、バザーロフはその思想および性格において、またロシア社會の改革についてのプログラムにおいて、チエルヌイシェフスキの六〇年代人とのあいだに多くのちがいをもっている。バザーロフとピースレフをむすぶ系譜を考えるなら、六〇年代の階級民主主義者の二つのタイプ、二つの政治的プログラムがあったと見ることも可能である。しかしこのためにはラフメートフ的、チエルヌイシェフスキ的傾向と、バザーロフ的、ピースレフ的傾向とが七〇年代においてどのように變化し、どのような相互關係をたもつかを検討することが必要である。

著者は「父と子」をトゥルゲーネフのレアリズムの頂点におき、一八六二年以後の社會的反抗の強化とともにトゥルゲーネフが自由主義的西ヨーロッパ主義の立場をますますつよめてゆくことを指摘する（九〇頁）。すなわちトゥルゲーネフはゲルツェンとの長い交わりを断ち、アレクサンドル二世に忠誠の手紙を送り、純粹藝術のなかにとじこもろうと努める。この時から彼の創作の第四期がはじまる。これは作者の思想的危機の時代であり、「煙」（一八六七）を中心とするペシミスティクな作品

が書かれる。この時期にトゥルゲーネフは五〇年代の作品、たとえば「貴族の巢」に見られるような、民衆のスラヴ主義的な理想化をすて、またゲルツェン、オガリョフの主張する、ロシアの發展の獨自性の思想にたいしても否定的な立場をとる。彼は民衆にはなく、インテリゲンツィヤにのみをかけ、ヨーロッパ的教養をもつ貴族階級の少数者がロシア社會の改革の基本的な力となるものと考えた。

「煙」のなかでは、ロシアの急進的な青年たちは淺薄空虚な口舌の徒にすぎず、彼らの指導者グバリョフはオガリョフにたいするカリカチュアであり、權勢欲のつよい、鈍重な人間として描かれている。しかしこうした人々にたいする批判者として、いわば作者の立場を代表する主人公リトヴィーノフもまた、ロシアの改革のためには、ほとんどなにごとをもなしえない人間であることはあきらかである。彼はその出身において半階級人であるが、トゥルゲーネフの意見によれば、バザーロフに代わるべきあたらしいインテリゲンツィヤのタイプである。トゥルゲーネフはバザーロフの時代がすでに過ぎて、あたらしい時代の主人公はリトヴィーノフのような、謙虚な勤勞者でなければならぬと考えている。しかし實際に描かれたリトヴィーノフは自分の所有地の改革のことしか考えない經營主である。彼は政治には無關心であり、ロシア人はまだ政治的意見をもつほどに成熟していないと考えている。こうして作者が肯定的主人公として描いたリトヴィーノフは現實には弱々しい、非個性的な形象となる。この作品のなかで作者の思想の傳達者

の役をしているのはポトゥーギンであるが、これも西ヨーロッパ主義の多辯な宣傳者であり、生命のない形象である。トゥルゲーネフの西ヨーロッパ主義の理想は、「煙」のなかでこのような具象化をあたえられることによって、その卑俗さを露呈する。

一八六九—七〇年にトゥルゲーネフの創作の第五期がはじまる。この時期の中心的な作品は「處女地」(一八七七)である。彼は長年の外國生活が自己の作家活動のさまたげとなつて、ことを痛感しつつも、ナポレオン三世没落後にパリに移り、あたらしい共和國に大きな期待をかけている。また七〇年代にフランスを訪問した、多くのロシヤの亡命革命家たちと親交をむすび、ラヴロフの機關誌「前進」には物質的な援助をあたえた。しかしこれらのことは彼がナロードニキの思想に共鳴したことを意味するものではない。この時期に彼の思想的危機は克服されたとは言え、漸進主義的プログラム、自由主義的改革のコースはさらに發展している。リトヴィーノフのハムレット的傾向は「處女地」のネジダーノフのなかに、漸進主義的實務主義の傾向はソローミンのなかに具現される(一〇五頁)。

「處女地」に先立って「プーニンとパブリリン」、「時計」のような、革命運動をテーマにした作品が書かれている。本書ではこれらにはふれていないが、「煙」から「處女地」にいたる作者の思想的發展がこれらの作品に即して解明される必要がある。

トゥルゲーネフは「處女地」において「まちがった、生命の

ない事業にとりかかった、善良な人々」を描くつもりであった。しかしネジダーノフもマルケエロフも自分たちの運動の失敗の原因が事業にあるのではなく、自分たちの個人的な資質にあるのだと考えている。それゆえ作者の最初の意圖はその反對の結果をもたらしている(一一七頁)。

この作品のなかで作者の理想を代表するものは雜階級人の漸進主義者ソローミンである。彼はニヒリズムの「疾患」から解放され、國民の眞の利益を理解する能力をもった、あたらしいバザエロフであり、それまでのトゥルゲーネフの多くのロマンのなかでの、長い探求の合法的な歸結である(一一八頁)。

著者はロマンのなかの民衆の描寫が一面的であることを指摘する(一二〇頁)。「獵人日記」で農民のすぐれた素質を感動的に描いたトゥルゲーネフはここでは農民を教養のない、無智、粗暴の群集、酔っぱらいや亂暴者の集合として描く。彼らはナロードニキの宣傳にまったく耳を傾けないばかりではなく、マルケエロフをとらえ、打ちのめして、警察にひきわたし、ネジダーノフにたいしては、打ちのめすことはしなかったが、マルケエロフの場合よりも、もっとひどく精神的に打ちくだいてしまふ。こうして民衆のテーマは「處女地」のなかではゆがめられて反映している、と著者は述べる(一二二頁)。

しかし「人民のなかへ」の運動の参加者にたいする農民の側からの無理解は一般的な現象であった。民衆のこのような側面を描くことによって、トゥルゲーネフはナロードニキと民衆との關係における本質的な問題を提出しているのではないかと思

われる。今日のソ連におけるナロードニキ評價に共通のものはナロードニキが民衆を理想化して、これを理解せず、民衆の要求を知らず、民衆に無縁な思想をこれにおしつけたゆえに、彼らの運動が失敗したとする点である。一方において、「人民のなかへ」の運動の参加者たちの人民への愛情と期待、革命と社會主義への志向が尊重され、他方において七〇年代のロシア社會の諸條件のもとで不可避免的に農民に依據せざるをえなかった彼らの社會主義の空想性、農民の後進性と沈滞についての、また社會主義への敵意についての彼らの無知等々が批判される。ナロードニキ評價のこの二元性は本書の著者のもとにも見いだされる。漸進主義者ソローミンを自己の理想とする作者の政治的立場の限界性が強調されると同時に、ソローミンおよび作者によって批判されているところのナロードニキ思想の空想性が指摘される。このことと関連して、著者はつぎのように述べている。「ナロードニキたちにたいするトゥルゲーネフの一定の同情、およびこれと同時に彼らのたまたかの目的や彼らのたまたかの手段にたいする懷疑的な態度はロマンの主人公たち——ネジダーノフ、マルケエロフ、マリアンナの運命に悲劇的な色調をあたえている。」(一一五頁)。ナロードニキ運動のこの悲劇性の認識こそ、「處女地」の中心的思想として解明されなければならない問題であろう。

ブストヴォイトはシビヤーギン、カルロメイツェフのような、改革後の自由主義的および反動的貴族の諷刺的描寫に注目し、これを七〇年代のロシア文學への大きな寄與と見ている

(一二七頁)。この場合、この作品のなかの一つのエピソードを構成する商人ゴルシキンにも注意を向ける必要があるだろう。この商人はナロードニキの運動に資金を寄附するが、のちにとらえられて、運動を裏切る。ゴルシキンは教養のない、虚栄心のつよい、粗野な人間として描かれているが、ナロードニキ運動に商人や事業家が資金的な援助をあたえた實例は少ない。このことはこの運動がブルジョア民主主義運動としての側面をもっていたことを語っている。作者はこれを偶然のものとしてではなく、運動の重要な側面の一つとしてとらえているものと見ることができよう。

トゥルゲーネフのこの最後のロマンは發表當時においても、その後においても、失敗作と見なされ、作者自身も同様に考えている。本書ではこれらの事實がつけられるのみであるが、この作品を失敗作と見なす説は、今日までのところ不動のもののように見える。

「處女地」が發表された當時、左右兩翼の批評はそれぞれ相反する立場からソローミンの進路を拒否した。ミハイロフスキーはロマンの主人公たちを愚鈍な人間と呼び、作品全体を虚偽のものとして見なした。作者自身は「ロシアのそとに住んでロシアについて小説を書くことは不可能である」と語ることによって自己のとりあつかった題材についての知識の不足を告白している。このことは、ブストヴォイトの指摘しているように(一一五頁)、このロマンのなかで「人民のなかへ」の運動そのものが一種の「變裝のヴォードヴィル」のようなものとして描かれ、

また一八六九―七〇年のネチャイエフ團の活動と一八七三―七四年のナロードニキ運動との二つの發展段階が混同され、内省的で行動力のないネジダーノフや運動の理論を正しく理解せず、農民と語るすべを知らないマルケエロフのような革命家たちによって、この運動が代表されていることのなかにも表われている。

しかしこの作品が、これらの缺點にもかかわらず、なによりもまずナロードニキ運動の悲劇性の認識の上に書かれていることは作者がこの運動の本質をとらえていることを意味する。このことはネチャイエフ事件に取材し、革命運動にともなう永遠の問題をとりあげつつも、社會的變革一般の否定に到達したドストエフスキーの「悪靈」やナロードニキ運動の中心的な活動家の一人なるクラフチンスキーによって書かれ、この運動への批判をまったく欠いている「アンドレイ・コジュエーフ」のような作品と「處女地」とをくらべることによって一層あきらかになるであろう。この意味で「處女地」にたいする従來の評價には、あたらしい検討が必要であろう。

自作の不評によってトゥルゲーネフは創作から離れることを決意するが、七〇年代のすえからふたたび創作の筆をとり、「散文詩」「勝利する戀の歌」「クララ・ミリーリッチ」そのほか、彼の従來の作風とはいちぢるしくちがった作品を發表した。これが彼の創作の最後の時期である。ロシア國內の政治的反抗の強化と社會運動の停滞の時期になると、彼はいつも暗い色調の作品を書く。一八六二年後の反動期におけると同様のことが、七〇年代のすえから、とりわけアレクサンドル二世の暗殺後の反動期の作品の上にもみとめられる(一二九頁)。しかしこの時期にも、たとえば「散文詩」のなかには人間性への深い信頼につらぬかれた多くの作品がある。

全體として本書は、その講義要綱としての性格にもよるが、トゥルゲーネフの研究における、なんらかのあたらしい問題を提出することを意圖したものではなく、ソ連におけるこの研究領域での今日までの成果を簡潔に要約しているということに、その意義をもっているように見える。

(一橋大學教授)